
星のカービィ それぞれのプロローグ

@ABC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のカービィ それぞれのプロローグ

【Nコード】

N0825Z

【作者名】

@ABC

【あらすじ】

動き出す闇。彼らはそれに気付いた。ドロツチエ団、メタナイト、そしてカービィ達は、それぞれ戦いの中へ身を投じていく。

ドロツチエ団が呼ばれる（前書き）

原作を知っている人向けに書いているのでキャラの容姿の説明はオリジナル以外省きます。ご了承ください。

最初はドロツチエ団です。

ドロツチエ団が呼ばれる

「団長！お手紙ですよ！」

「ん？」

ドロツチエが顔を上げるとスピンの手紙を持ってこちらに走ってきているところであつた。

「デデデからですけど…何なんですかね」

首を傾げるスピンにドロツチエはやや呆れながら答えた。

「なんか頼みがあるからしいが…良いのか？国王が盗賊に頼みごとなんかして」

「普通にアジトに手紙が着くワシらもどうかと思うがの」

口を挟んできたのは自称天才科学者ドクである。

実力は十分なのに自称としか思われたいのは後で説明するとしよう。

「いんだよ。平和な証拠だ」

呆れた口調は戻さずにドロツチエが返す。

「それよりなんて書いてあるんですか？」

そわそわしながらスピンが尋ねた。本当は早く知りたくて仕方ないだろうに団長宛の手紙を勝手に読むのは気が引けるのか、覗き込むような事はしない。

ちなみにもう一人の主要メンバーであるストロンはいつも通り、近くにいるが口を開く事は無い。

「話があるからすぐに来い、とだけある。察するに火急の件なんだろうが、ちょっと雑すぎる気がしないか？だんだん右上がりになつてるし、字と字の幅もバラバラだし」

「確かに、二人はどう思う？」

ストロンは無言で首を縦に振る。これはスピンに賛成している、という意味だ。

「仮にも基本的にバカみたいに平和とは言え形だけは国王の位を持

つてるとかいう噂なんだからよ、もうちつと」

「団長、火急だと察しているなら早く行った方がいいのでは……」
ぐだぐだと続けるドロツチェに割り込むのは大抵ドクの役目である。

ドクが機械ウンチクを語り始めた場合は立場が逆になる。

「しゃーねー、行くか。めばしいもんも無いし……チューリン達は留守番な」

「「イエス団長！」」

チューリン達の見送りを受けながらドロツチェ、スピン、ストロンは出発した。そしてもう一人は……

「よし！待っておれ！すぐに移動用マシンブーストウィリーを準備する！このマシンは従来の……」

ドクが説明を始めた時には三人はアジトの外であった。

ドロツチエ団が動く

「遅い……」

デデデの呟きはドロツチエ団へ向けたものだ。出した手紙は時間的に届いたばかりだろうから、来ている方がおかしいのだが事情を知っていたら彼が焦る気持ちも理解できるだろう。

「まだ手紙が届いたばかりだと思いますよ？来てないのが当たり前なのでは」

期待も予想もしていなかった返答にデデデはいらついた。まるで自分の心を読んだくせにあえて質問したかのようなタイミングである。

いくら質問したワドルドウが有能な科学者でもそんな事出来るはずないだろうが。

そして近くにいるもう一人の発言は火に油を注ぐことになる。

「そうですね、彼等が遅いのでなく国王の気が短いのです。」

敬語で、しかしその内容は情け容赦ないものだ。

言ったのは不敬隊長の異名を持つワドルディである。

しかし、彼自身自覚は全くない。以前デデデがもつと礼儀を学べと言った時、ワドルディはこう答えた。

「やろうと思えば貴方を殺して新たな王になることも出来るのにそれをしないのは立派な礼儀だと思いますけど」

と、さらりといつてのけた。しばらく固まってい反論するのを忘れてしまったのを覚えている。その後も色々おかしいとは思ったが言い返す気にはなれなかった。

が、今回は言い返してやろうと思った。

この状況では仕方ないだろう、などと本音を言っても面白くもなんともないしストレス発散にもならない。この礼儀知らずに何と云ってやるうか。

そう考え始めた所で今度はカチャン、と音がした。

さらに不機嫌さを増したデデデが音の方向に目を向けると、噂をすれば何とやら。ドロツチエ団が鍵が閉まっていたはずの窓から入ってくるではないか。

「おいデデデ。用ってなんだよ。手紙にはろくに書いてねえしよ」
何事も無かったかのようにドロツチエは口を開く。というかピッキング程度彼らには朝飯前で当たり前なのかもしれないが。

一氣に気が抜けたデデデは侵入者たちに座るよう勧めた。

「普通に入ってきてくださいよ。えーようがあつたなんてしりませんでしたーとばかりに殺っちゃいますよ？」

「やれるもんならやってみな。代わりにお前等皆一文無しになるけどな」

笑いながら冗談を言い合うワドルディとドロツチエ。この二人ならやりかねないと傍観者達はよく知る方を見ながら思ったので笑っているのは本人達だけである。

「で、用って何なんだ？」

しばらく笑っていたドロツチエは表情を引き締めて、改めて問い直した。

場の空気が一変し、視線がデデデに集中した。

「お前達に集めてもらいたい物がある」

「あ、集めて？」

スピンが驚くのも無理はない。盗賊である彼らは国王に頼みごとをされる立場ではないのだ。

「集めてもらいたい物が何かは後で聞こう。それより何で俺たちに頼むんだ？他にも頼める奴はいるだろう？」

当然の疑問である。数多の場所の数多の危機を救ったカービィや、彼と同等の実力を持つ仮面の騎士、メタナイトもいるのだ。ちなみにドロツチエも同じレベルの実力を持っている。

デデデはしばらく沈黙した後口を開いた。

「両方とも連絡が取れん。メタナイトは修行の旅に出たとメタナイトが言っていたが…カービィの方はさっぱりだ」

「はあ！？それこそ一大事だろ！」

ドロツチエは声を荒げた。

「それなら先に二人を探した方がいいんじゃないの？」

スピンも早口で問いかけた。ストロンも口は閉じたまままだ同じ心境だろう。

「あの二人が簡単にやられるはずがないです。もしそうだったら毎度カービィにあっさりやられてる王がまともに戦えるはずがありません」

「……ワドルデイ、席を外せ」

怒気をはらんだ声でデデデは静かに自分を馬鹿にした部下に命じた。

「いいんですか？護衛が出てつても。襲われても知りませんよー」

「こいつ等はお前よりよほど頼りになる。さっさと出て行け」

「へーいへい」

ワドルデイは心底つまらなそうに立ち上がり、部屋を出て行った。一方デデデはうつむいたまま微動だにしない。呼吸の音が聞こえるだけだ。

ワドルドウがしばしお待ちを、と言ってからだいぶ経ちようやく顔を上げる。

「すまん、あいつがいると緊張感が薄れるんだ」

十回以上たつぷり深呼吸をしてようやく落ち着いたのか、デデデはドロツチエ団に頭を下げた。

「いいからもう本題を進めてくれ。なんかどんどん先延ばしになってる」

「それもそうだな。ワドルドウ、あれを出せ」

「はい」

ワドルドウが手元に置いてあった鞆から小さな黒い塊を取り出した。

「これ…は？」

スピンが息をのむ。恐る恐る手を伸ばしたが、ドロツチエがそれ

を阻んだ。

「だ、団長？」

「…おい、これは何だ」

さしものドロツチエも僅かに緊張しているのが見て取れた。

目の前に置かれた黒い石。それが自然の物ではないのにドロツチエは気付いた。

「闇の秘宝。ワシらはそう呼んでいる」

「闇の…秘宝？」

ドロツチエは黒い石を見つめる。闇の、と言われてみれば、微弱だが邪悪な力が宿っているのがトリプルスターの使い手である彼には何とか感じ取れた。

逆に言えば、相反する聖なる力を持った武器の所有者でも簡単にはわからないほど弱い力。

「これを集めてほしい。訳は今から説明する。ワドルドウがな」

「人任せかよ」

デデデはそのつつこみを黙殺し、ドロツチエもそれ以上は何も言わない。

「簡単に言つと弱いとは言え闇の力を持っているのだから集めて壊してしまおうという事です。まあ破壊の方法は見つかっていませんけど」

「いや、ホントに簡単だね」

「でもどうやって探すんだ？こんな力しか放ってないなら俺が見つけるより聞き込みした方が速そうだが」

「私達もその方法は実践しました。しかし効果はほとんど無し、それは何故か？…持っていた人の大半が嘘付いていたんですよ」

「嘘？なんでまた」

「はい、その理由は判明しました。闇の秘宝は人を魅せる力を持っているのです。魅せられた者は、欲望のままに行動するようになる」
「なるほど、闇の秘宝を手放したくないという欲のままに…か」

「そうです。けど、これ以上大きな行動を起こしてこれの元凶に気

付かれたら……」

「お前達では齒が立たない、と」

「……残念ながら」

「その点俺達は盗賊だからな。闇の秘宝の特性と合わせればそればかり狙つても何ら不思議ではない。トリプルスターは使うだけなら誰でも出来るから闇の力への耐性も比較的低いし、万一の時には対応できる可能性も高い。だから俺たちに白羽の矢が立ったわけか」

「はあ、なるほど」

ドロツチエの隣でスピンが目を丸くする。そして……

「そうか！」

「その発想は無かった」

説明していたワドルドウと、させていたデデデも納得顔だ。

「……気づいて無かったのかよ」

闇の秘宝の所有者の情報はデデデ達が集める事になった。

ドロツチエ団への報酬は団長がきっぱりと断った。

「俺達は金が欲しくて宝を盗むんじゃない。宝が欲しいから盗むんだ。金が欲しけりゃ金を盗む。貰い物なんかいらねえよ」

と言う事らしい。

そしてその日は解散となった。

一人足りないとは誰も気づかず……

フレイマーの対策

このププブランドではかなりの人気を誇る宝石店『シャイニング』。その店を経営しているフレイマーが闇の秘宝の力に侵されているらしい。

ドロツチェは五階建てのその店を興味深そうに見上げた。

「ここだよな？例の宝石店は？」

「そうじゃないですかねえ」

「知らん知らん、ワシは知らん！そもそも引き受けると誰が言った！」

「俺」

ドクはUFOから煙を出してまで怒りを表している。その理由はおそらく察しが付くだろう。

しかし部下の機嫌が悪かろうとドロツチェのやる事は変わらない。

「ここなら何度か入った事あるし、余裕だろ」

「ああ、結構良いのありましたよね。結局気付かれたの大分後だったらしいですよ。だから今回も余裕そうですね」

「油断するなよ。警戒厳しくなってる可能性もあるからな」

「……団長、さっきと言ってる事が……」

緊張感が全くない二人にストロンは呆れた風情だ。何も言わないが。

ドクも機嫌が治っていないので、二人を注意する物は誰もいなかった。

「パスワードか……」

「それなりに厳しくはなってるみたいですね」

彼らは今回も裏口から侵入することになっていた。

関係者以外立ち入り禁止と書かれた扉は以前はただ鍵がかけられていただけであったが、今は数字入力式のロックが掛かっている。

「ドク、頼むよ」

「仕方がないのう。このロック・バックでパスワードを解除してやるう」

UFOの側面から出てきたアームが握っている機械がキリーンと効果音を出しながら光った。ドクの無駄な設計の賜物である。しかしこの演出が好意的な評価をされた事は一度も無い。

自分の活躍の場と思い、ドクはやや機嫌が良くなった。一番高齢のくせに、結構お子様である。

「いや、待てドク」

そこにドロツチエが待ったをかけた。

「ちよつと試したい技があるんだよ」

「ほほおう、試したい技あ？」

再びドクの機嫌が悪くなる。

「ああ、この手の扉も開けられる方法は他に無いかと思ってさ」

「他につて、まさか…」

何となくわかり始めたスピンの顔に冷や汗が浮かぶ。この団長に限って必要もないのに力ずくでやることなど無いとは思っのだが、他に何も浮かばない。

「そんな過激な方法で無駄に注目を集めるきかのお？」

心の中では、バカ言ってないでさつさとワシにゆずれ！とドクは言っている。

「待て待て、ぶっ壊すわけじゃない。そんな力任せな事するかよ」

「何い？」

ぐるぐるメガネで周りからは見えないがドクは目を見開いた。

「まあ見てろつて」

ドロツチエは懐から愛用のピッキングツール（ただの針金）を取り出した。

「そ、それで何を」

スピンの言い終わらないうちにドロツチェは扉に、いや入力装置に近づいた。そして、

何故か勢いよく5と3のボタンの間にピッキングツールを突きこんだ。

三人は声をあげる事も出来ず、ただ呆然とそれを見ていた。

その間ドロツチェは針金を入力版の内部で動かし回している。作業が終わり、針金を引き抜いた。

「な、何やってんすか」

ようやく正気に戻ったスピンの大口をあげたまま問いかける。

「ピッキングさ」

ドロツチェはニヤリと笑って固く閉ざされていた扉に手をかけた。普通に、開いた。

「鍵穴式では無いじゃろう。そもそもピッキン」

「鍵をあけるのがピッキングだ。めんどくさい説明は聞きたくない」
言葉を遮られたドクの耳がびくびくと動く。

「と、とにかく何したんですか？」

不穏な空気をようやく察知できるようになったスピンの説明を求める。

「ピッキングツールを突き刺して中の回路をいじくったのさ」

「……力技なんじゃ」

「おいおい、誤解すんなよスピン。適当に突っ込んだら中の奴らになんかあったってばれるだろ？だからそうならないように絶妙の場所を狙った。力だけじゃなく、精密さ、慎重さ、判断力、そして勘を必要とする超高難易度の技だぞ。まあ、中の構造なんとなくがでも解ったのはドクの話の流れしながらでも聞いていたおかげだな」

最後の一文は当然嘘である。

「そ、そうかの？」

「そうさ」

しかしドクはあっさり信じた。

「じゃ、作戦通り行こうぜ」 ドロツチェとスピンは、足音を忍ばせながら内部に入って行った。

「さてと、こちらも始めるかの」

ドクはUFOの中のボタンの一つを押した。高周波が放たれる。操縦席の液晶に『シャイニング』の内部が写し出される。

実は、この店に闇の秘宝があると確証があつて来たわけではない。まだ可能性の範囲である。

しかも、かなり改装されてしまっているので、あつたとしても場所が分からない。

なので、ドクが外からナビゲートし、闇の秘宝がしまつてある可能性の高そうな場所を指示する。

近くまで来たらドロツチェが闇の力を探る。

そうして少しでも効率を上げるのだ。

なので、スピンとストロンは今回は囷である。ストロンが外部から派手に攻撃して注意を逸らす。その隙にスピンの一人で入り込むふりをする。

その二人の対処をしている間にくまなく探す、という作戦だったのだ。

しかし、作戦は変更を余儀なくされた。

「囷まれておるの」

驚いた様子のドクの言葉にストロンは頷いた。それなりに優秀な盗賊である彼等に気付かれないほどの実力を全員が持っているのだ。「店主が雇ったのか。こりゃ、思ったよりも厳しくなりそうじゃ」

一方、侵入組も分かれた直後に、雇人達に足止めを食らっていた。

ドロツチエの誤算

店側が出した客に避難を促す放送を聞き流しながらドロツチエは舌打ちした。

「誤算だったな」

ドロツチエは数多の警備員に囲まれていた。二十人近くの団体は、徐々に確実に、ドロツチエとの距離を縮めてきている。

手柄を急いだのか、それとも作戦か、はたまた自信があったのか。サーキブルが一人で接近してきた。頭頂部のカッターを振りかぶり、ドロツチエの首を目掛け投げ飛ばす。

高速で回転しながら迫ってきたそれを、ドロツチエは片手で受け止めた。

周りの空気が変わる。先ほどまでは余裕綽々といった体だったはずが、ドロツチエが軽く攻撃を止めたのを見て警戒し出したようだ。それを正確に読み取ったドロツチエは、試しにカッターを握り潰してみた。パラパラと破片が落ちて、床で跳ね返る。

再び場の空気が変化した。さらに緊張感が増している。これからほぼ全員が本気で向かってくるだろう。何人かはすでに諦めかけてもいるようだ。

「まあ、所詮金の力なんてそんなものだろ」

ピクツと何人かの肩が震えた。

「どうせお前等金で釣られた奴らだろ？怪我したくねえならとつとと辞職届け持って店主の所行きな」

ドロツチエが右手のトリプルスターを正面に突き出す。驚いた事に、全員がドロツチエに怒号と共に跳びかかってきた。

「そんなくらの根性あんならもつと違う事しろよな」

嘆息しつつもトリプルスターを振り上げ、迎え撃った。

一方、外のドク、ストロン組は…

「何という人数じゃ」

UFO内部のリーダーで確認したところ34人。これで全てではないだろうから、この店のためだけにしてはどう考えても多すぎのような気がするが…

「闇の秘宝のせいかな」

かなり儲かっていたようだから金に糸目を付けずにそれなりな実力者を片っ端から雇ったのか。

雇う折りに闇の秘宝を見せられれば、是非と答える者が大多数だろうからこれだけの人数と契約が出来たのだろう。

「全く厄介な」

これが一人だけに取り付くとかだったらまだよかったのだが。

ドクがそう考えているうちに至近距離まで接近されていた。

「おとなしくしていれば手洗い真似はせん」

先頭のバウファイターがどこからか縄を取り出した。それで縛るつもりだろう。だが、

彼等は大人しく捕まる気など毛頭なかった。

ドクのUFOから大量の煙が噴き出し、全員の視界を覆った。何人かの咳き込む声が聞こえる。その声の方向目掛けてストロンは右ストレートを繰り出した。

いち早く察知したバウファイターが、真正面から受け止めた。

「甘い！」

ストロンの巨体を軽々と上空に放り投げる。メタルガーディアンが無防備な背中に狙いを定め、光球を発射した。

ストロンは右手のハンマーでそれを打ち返した。メタルガーディアンはそれを軽々回避する。光球は下で戦いを眺めていたワドルドゥを吹き飛ばした。

着地したストロンはドクの方に目をやった。向こうも囲まれ、苦

戦しているがいるがとりあえずは無事なようだ。

それを確認すると、ストロンは再び敵の群れに突っ込んでいった。

「おおうりゃあ！」

ボンカースが雄叫びを挙げ大ココナッツをストロン目掛け全力投球してきた。

ストロンがハンマーで打ち返すと、ボンカースもまた打ち返す。

そして再びストロンが打ち返し、ボンカースがハンマーを振り上げた所で、何かがストロンの腕をがっちりつかんだ。

「隙だらけだよ」

はるか後方からジユキッドが両手を飛ばしていた。小さな手だがその力は並ではない。

振り払った時にはココナッツは眼前に迫っていた。

ココナッツがストロンの腹にめり込み、破裂した。

二つの強力な衝撃がストロンを襲い、彼の口から出た血が地面を赤く染める。

「降伏する気になったか」

バウファイターが膝をついたストロンに嘲るような口調で言った。ストロンは無言でハンマーをなぎ払うが、軽々回避される。

「おおうじょおう際がわりいじゃねえか。まああこおんなんで終わってもつうまんねえけどよお！グアッハッハッハッハッハ！」

大口を開けて高笑いしているボンカースに爆弾を投げつける。それは見事、吸い込まれるように口の中へ治まった。

「ボンゴオア！？」

ボンカースは慌てて爆弾を掴んだが、力が強すぎたので爆発を早める結果となった。

「ブモオオオオオオオ！」

顔面、と言うより顔全体を黒焦げにして戦闘不能となったボンカースを見降ろし、バウファイターは役立たずめ、と吐き捨てた。

ストロンはくさり付きの鉄球をメタルガーディアンの方へ飛ばした。予想外の攻撃に対応が僅かに遅れる。その一瞬の差で完全に避

け切れず、装甲の一部が砕ける。

よるめいたメタルガーディアンにストロンは爆弾を投げつけた。しかし今度は光球で相殺させられる。ホッと一息ついた所で、最後に煙の中からハンマーが飛んできた。これは完全にメタルガーディアンの目玉に直撃した。

次は、とストロンが振り向いた所に、ジュキッドの両手があった。頭をがちりと捕まえられて、ストロンは引き離そうとするが、手が届く前に顔面から地面にたたきつけられた。

「よくもやってくれちゃって、活躍すればギヤラが増えるからいいんだけどね」

ストロンが両腕を使って立ち上がろうとすると、ジュキッドはあっさり手を離れた。

「なかなか頑張るねー」

「だがそれは無駄な足掻きだ」

先ほど倒した二人よりもはるかに別格であろう二人が悠然とこちらに向かってくる。ここから逆転するのは厳しいものがあるだろう。だが諦める訳にはいかなかった。少なくとも団長は自分の知る限り諦めた事は一度もない。

ストロンは渾身の力で鉄球を投げ飛ばした。しかしそれもむなしく横から転がり込んできた何かに弾かれる。

鋼鉄の体を持った何か…ビッグメタルンは両手足を出してゆっくりと立ち上がった。

新手。もはや絶望的である。だが、まだ勝機が消えたわけではない。本当に僅かだがまだ残っているのだ。

再び鉄球で攻撃するがやはりあっさりと防がれる。

地面に落ちた鉄球をストロンが引き戻す前にバウファイターが拾い上げた。そのまま鎖を引っ張るが、びくともしない。ストロンもまた向こう側で鎖を引っ張っていた。

この綱引き、いや鎖引きは拮抗していた。力だけならストロンに分がある。しかし向こうにはビッグメタルンが腰を下ろしているの

で全く動かない。

その状況を変えたのは、残る一人ジュキッドである。

「もう終わりだよ」

ジュキッドが両手を発射した。手刀でストロンの両足を払う。

「ぬおう！」

バウファイターが鎖を振り上げる。踏ん張る事が出来ないストロンは鎖を握ったまま空中に放り出された。

自分の方に落ちてくるストロンに狙いを定め、ビッグメタルンは飛び上がって渾身の頭突きを放った。

高々と突き上げられたストロンは、成す術無く背中から地面に落下した。

ストロンが少数精鋭であつたのに対し、ドクは大人数を相手取っていた。

ストロンの方に5人。残り29人中立っているのは21人。1人は向こうの巻き添えで倒れたからドクが倒したのは7人、と言う事になる。まだ4分の1も減らしていない。

しかしUFOの方は限界が近かった。

精鋭はいなくとも、全員が全員気配を消す事の出来る実力者なのだ。盗賊である彼らは今でこそ朝飯前だが、習得には何年もかかった。

数多の攻撃でドクの愛機は傷だらけになり、エネルギーも残り僅かである。

「…まずいのお」

もっと力があれば、と思う事は何度もあつた。ドロツチエの役に立ちたい、という思いもあるが、それ以上に悔しいのである。

例えば、団員全員が本気でドロツチエを殺そうとしても無傷で叩きのめされるだろう。

向こうは力の3割も出さずに。

ストロンが止められなかった物を軽々受け止めた事もある。スピ
ンが追いつけなかった物に瞬き一つで追いついた事もある。ドクが
打開策を必死で出そうとしているのをさらにと最善の策を見つけて
しまった事もある。

圧倒的すぎる差が悔しくてたまらない。

こんな状況もドロツチエならば何事も無く覆せるだろう。

しかし、ドクの頭の中に浮かぶ策では無駄な足掻きにしかならな
いだろう。そう結論付けるのを待ってたかのように、ドクを囲って
いた全員が飛びかかってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0825z/>

星のカービィ それぞれのプロローグ

2011年12月22日11時52分発行